

リンダ フィッツジェラルド

アイルランド出身の元カトリック信者 (1/4)

:

明:孤独感から人生の新たな一 を求めていたリンダは、サウジアラビアでの仕事を引き受けます。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: リンダ フィッツジェラルド

日 2 May 2014

集日 12 May 2014

まえがき



リンダ フィッツジェラルド (ムスリム名ハディ ジャ) は、アイルランドの首都ダブリン近郊のウィックロ という街の出身です。彼女の家庭は非常に 格な口 マ カトリック信徒で、9人の兄弟 妹がいます。彼女の父 は 技 者で、母 は主 をしています。

リンダはウィックロ で 教育を え、秘 成学科に み、その ダブリンで9年 に渡って いていました。

在ハディ ジャと呼ばれている彼女は、サウジアラビアに渡航してイスラ ムに改宗しました。この 事で、彼女は 地を れ正道に かれた を ります。彼女に神の祝福がありますように。

私がどのようにしてサウジアラビアにやって来たか

私は若者の社交クラブに入っていました。彼らは 月曜日にミ ティングを行い、その パブに行っていました。私自身も 々彼らとパブに行きましたが、ほとんどはミ ティングに 宅していました。ある夜、クラブに新しい女の子が入ってきたので、パブに行って彼女と会 し、 迎えることにしました。すると彼女はサウジアラビアに人材を派遣する者で いているということが分かりました。彼女は 山のことを教えてくれ、私はそれに魅了されてしまいました。それ以前、サウジアラビアのことは殆ど いたこともありませんでした。夜がふけるにつれて、私はさらに 味を持ち、パブを出る にはすっかりサウジに行きたくなってしまっていました。

1993年のその年、私はある仕事に 募しましたが、 用には至りませんでした。その しばらくはその事を考えなくなりましたが、クリスマス休暇を 家で ごした私は停滞感にとらわれ、人生で何か うことをしなければならないと 意しました。友人たちは皆ボ イフレンドや夫を持ち、 なる物事を始めていました。急に私は自分には何のしがらみもないことに 付きました。クリスマス に都市部 に ってきた私は、人材派遣会社の例の女の子を れ、サウジアラビアの仕事をつけたら何でもいいから 介してくれと んでいました。彼女はこう言いました。「信じられないかも知れないけど、ついさっき公安部 病院が秘 を募集するファックスが来たのよ。」1994年の3月15日、私はここサウジに来ていました。

イスラ ムに する第一印象

サウジアラビアに行って、他の欧米人たちが最初に教えてくれるのは、いかにムスリムたちがとんでもない人々かということで、彼らが女性たちに酷い仕打ちをし、礼 所に行ったきり何 も ってこず、そしてバ レ ンで 酒や女 びに明け暮れていることなどに し

てでした。このようにして最初から偏見を持たされるのです。そしてそれがイスラームだと思われまされます。しかし、それはイスラームではありません。不幸にも、大半の欧米人たちはそのことに付かないのです。

いかにその偏見を脱することが出来たのか

私にとっては、最初から味津々でした。モスクで人々が礼拝しているのを見ると、私はそのような神への信仰を持てることは素晴らしいことだと思いました。そこでは床にリフレットが置かれていたため、拾いあげて読んでみたりもしましたが、欧米の友人から「そんなものを読んでどうすると言うの？ 彼らはあなたを洗いたいだけなのよ」と言われ、ずかしくなって止めてしまいました。その後私はアラビアのレッスンを受け始めましたが、教員のエジプト人男性にはとても感銘を受けました。彼は私が出会ったムスリムたちとは一線を画す人物で、彼の信仰は非常に純粋なものでした。私はこのムスリム男性との出会いがあったため、そのことへの相手として彼のような人物を必要としていました。私は怒りにまかせてすべてをイスラームのせいにしてしまいましたが、彼は忍耐強く、それがイスラームのせいではないこと、そして全てのムスリムたちがそのような態度を取るのではないことを明して分かせてくれました。

欧米人たちが他に言う事としては、全てのムスリムたちは非ムスリムへの布教にやっきで、洗おうとしてくるということでした。それゆえ、私がイスラームについて調べてくると私は非常に用心深くなり、彼らとの間に壁を作り、彼らが何を言おうが受け流すことにしていました。しかしエジプト人ハリドに対しては、私が先に言及したり、何かを言ってイスラームのせいにしてしまわない限りは決してイスラームについて言及したりはしませんでした。また、私は彼にし、全くイスラームとは無関係なことについて不正に暴言を吐いたりしたものでした。彼は常に平静を保ち、とても忍耐強く、ただ私に真実を知って欲しがっていたことは明白でした。彼はただ、私が不公平だったこと、そして誤った情を信じ込まされていたことを私に付かせたかっただけなのです。

そしてラマダン月になりました。このサウジ人男性たちは「食べ物のおいがるぞ、君たちはここで食べるべきではない、私たちへの敬意をもっと示すべきだ」と不平不平を述

べねました。私は机の上に水が入ったグラスを置くことすら出来ないことへの理解に苦しみました。局、彼らは神への 犠を うべきなのであり、私の机の上に水があったとしても に留めるべきではないのです。以下の私の日 からの は、ラマダ ンの始まりに私がどう感じていたかをよく示していると思います。

「ラマダ ン。ああ、何という一ヶ月なのかしら。本当に腹がたつわ。『食べ物』という言 さえ使っちゃいけないのよ。彼らは皆、たいそうな殉教者であるかのように振る舞いだすけど、仕事すらしていないわ。一 中食べ明かし一日に6 しか かないくせに、私たち皆を完全に不信心者 いするのよ。」

友人のハ リドはきちんと 明してくれました。ラマダ ンでは深夜の礼 に励んだり、善き素行に努めてみだらなことや不平不 を言わないこと、 口をたたかないこと、喜 をたくさんすることなどについて 明しました。彼によれば、一部の欧米人は断食がどんなものかを好奇心から してみますが、それに大 足して 年やっている人もいますそうです。ある朝、私は断食してみることを 意しました。私は当初、そのことをハ リドはもちろん一人として告げていませんでしたが、しばらくすると彼に 付かれてしまいました。

ある日、彼のところにいると、彼は私に んで欲しい物があると言ってきました。彼はクルア ン写本のイエス（彼に平安あれ）に する章句を私に せ、まるで 重な宝石を渡すかのようにそれを私の 手にそっと置きました。私は 倒されてしまいました。 にそれを彼に返したかった ではありませんでしたが、もし私がどのように感じていたかを彼に言えれば笑われることを恐れ、尻 みしてしまいました。なので 局彼に返したのですが、彼がようやく「クルア ンを んでみたらどうだい？」と切り出すまで、そのことは何日も私の中でくすぶり けていました。そのときはまるで背中から重荷が降りたように感じ、私はそれを家に持ち り、その日の夜から み始めたのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/114>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。